

「日本遠征記」

NARRATIVE OF THE EXPEDITION OF AN AMERICAN SQUADRON TO THE CHINA SEAS AND JAPAN, PERFORMED IN THE YEARS 1852, 1853, AND 1854, UNDER THE COMMAND OF COMMODORE M.C. PERRY, UNITED STATES NAVY, BY ORDER OF THE GOVERNMENT OF THE UNITED STATES.

ペリー提督 (Matthew Calbraith Perry; 1794–1858) といえば、嘉永6年 (1853年) に黒船4隻を率いて浦賀に来航し、翌年の日米和親条約の締結により、200年あまりにもわたって鎖国を続けてきた日本を開国させた人としてあまりにも有名です。しかしながら、ペリー提督が植物や貝類に関心をもつ風流な人であったことや、この遠征の間に同行していた専門家や部下らとともに採取した多くの動植物の標本をアメリカ本国に持ち帰り、自然誌の研究に供したことは、一般にはほとんど知られていません。

ペリー提督は帰国後、ニューヨークのカルバリー教会のフランシス・ホークス牧師の協力を得て「合衆国政府の命により、合衆国海軍M.C.ペリー提督の指揮下で、1852、1853、および1854年に行われた清国諸海および日本へのアメリカ艦隊の遠征の記録」(以下「日本遠征記」と省略)全3巻の編纂にとりかかります。提督はこの「日本遠征記」に日本の動植物の研究成果も盛り込みたいと考え、鳥類標本の研究をフィラデルフィア博物学協会のジョン・カッシン博士に、魚・貝類標本の研究を友人でもあったJ. カーソン・プレヴールト氏とジョン C. ジェイ博士にそれぞれ依頼しました。また、植物標本については、農業専門家として日本遠征に同行したジェームズ・モロー博士を通じて、ハーバード大学のエイサ・グレイ教授の手に委ねられました。そしてこれらの研究成果は1857年に出版された「日本遠征記」第2巻に納められることとなります。

兵庫県立人と自然の博物館には「日本遠征記」全3巻が貴重資料として収蔵されています。この第2巻の自然誌の章には日本の動物の研究成果として、さまざまな鳥類のほか、新種として発表されたイトウ (*Sarmo perryi*; 種小名の *perryi* はペリー提督を記念したもの) やホタテガイ (*Pecten yessoensis*) などの、我々日本人にとってなじみの深い魚・貝類が、美しい色彩画とともに記載されています。一方、提督がもっとも待ちこがれていた日本の植物に関する研究成果については、独自に日本産植物図譜の出版を計画したモロー博士とペリー提督、グレイ教授との間のトラブルにより原稿の提出が遅れ、かろうじてグレイ教授がまとめた新種記載を含む乾燥標本の目録のみが掲載されたにとどまりました。それでも研究の元となった標本はのちに極東地域の植物地理を研究する上で重要な資料となりました。

このように「日本遠征記」はアメリカ側から見た当時の日本の姿や日本開国という「偉業」達成までの記録ばかりでなく、ペリー提督の自然誌の研究への貢献をも今日に伝えています。

(自然・環境評価研究部 松原尚志)

